

室町期歌会資料集成稿―釈文と略解題―(九)

石澤一志・武井和人・日高愛子・山本啓介

【緒言】

本連載は、多くが未刊・未整理のまま残されてゐる室町期歌会資料（及びそれに関連するもの）を、広く学界に紹介することを意図としてゐる。

小論では、国立公文書館（旧内閣文庫）蔵『室町殿月次和歌』（二二〇一

―〇一三六）に収められる、長祿二年に催行された「室町殿（幕府）月次

歌会」六点の釈文を掲げ、併せて略解題を付した。

〔1〕長祿二年正月二二日幕府月次始

〔2〕長祿二年二月一三日幕府月次歌会

〔3〕長祿二年二月一三日幕府当座歌会

〔4〕長祿二年五月一三日幕府月次歌会

〔5〕長祿二年十一月一三日幕府月次歌会

〔6〕康正元年十二月廿九日日野政光十三回忌品経和歌（抄）

釈文作成にあたり、以下の方針に従った。

(1) 漢字は原則として通行の字体に統一した。

(2) 丁移りを、「一・」一一、の如く示した。

(3) 上句と下句の間に、一字分空白を設けた。

(4) 肥前島原松平文庫蔵『室町殿月次／長祿二』（二四〇・一三）（国文学

研究資料館・日本古典籍総合目録データベース所掲画像による）との

異同を（松）で示した。

小論の一部は、JSPS科研究費一七K〇二四〇七の助成を受けたものである。

（武井和人）

1 長祿二年正月二二日幕府月次始

〔国立公文書館（旧内閣文庫）蔵『室町殿月次和歌』（二〇一・〇一三六）〕

詠梅万春友和哥（端作題）

右大将義一

三行三季
万代の春のともとやさき草の みつ葉よつはのやとの梅かえ

春日同詠梅万春友和歌

正二位藤原資任

同
咲梅も君にひかれて万代の 春を友とや契りをくらん

端作同 権大納言藤原公綱

色もかも君かまに／＼さく梅の えたにこもれる万代の春

権大納言藤原勝光

梅の花千代を十たひのはるかけて 色をも香をもしる君そみん

左衛門督藤原雅親

三行五季
すゑとをき君かかさしや万代を かこめにちきるやとの梅かえ

権中納言藤原為富一

うへて後万代の春かそへしる 友とやちきる庭の梅かえ

権中将藤原教国

万代の春しる君に契りをきて みきりの梅の花そさかふる

左近衛権中将藤原雅康

三行三季
久にへんよはひもしるく万代の 春をかさぬる宿の梅かえ

左中弁藤原益光

三行三季
万代の春の友そと契りをきて 袖ふれなるゝ庭の梅かえ

讃岐守成之

松ならぬ梅もちとせを十かへりの 春にやさかむ君にひかれて

左京大夫義直

軒ちかみ君かかさしの梅かえや 猶さかゆかむ万代の春

左衛門佐義統二

君そみむ千代万世をいやつきに 色かはりしる庭の梅かえ

* 兵庫教氏 * 兵庫一兵庫頭（松）

すゑとをき君か軒はにさく梅は いくよろつ代の春をしむらん

伊勢守貞親

さきそめしほとは千里の梅の花 万代までもはるや契らん

詠梅万春友和哥

権僧正増運

契りをく君かよはひの万代を 色かにこむるやとの梅かえ

端作同 沙弥道賢

うつしうふる梅をはしめて君かへん 万春しる木にも草にも

権律師亮憲

君かため花の心もよろつ代を さしてにかえの梅にほふなり三

* にかえ一わかえ（松）

（一行分空白）

長祿二年正月廿二日月次御会始

題者 左衛門督

読師 同
講師 雅康

（武井和人）

2 長祿二年二月一三日幕府月次歌会

〔国立公文書館（旧内閣文庫）蔵『室町殿月次和歌』（二〇一・〇一三六）〕

詠三首和歌

右大将義一

見花

花みれはさらにそよはるさかぬまに 日数いそきし春の心も

蛙聲幽

水にすむ蛙のこゑはうたかたの あはれとそきく小田のをち方

嶺雲

みるまゝにたかねの雲の色くれて 麓のみちは人かけもなし

春日同詠三首和歌

題同 正三位藤原資任

身ひとつそふりまさり行ともとみし 四 花は老木もさかりなれ共
ね覚する床もへたてしかはつなく しつかかと田のよはの一こゑ
見わたせは松はらとをくかゝる也 あらしやよはきみねの白雲

端作同 権大納言藤原勝光

なかむれはちらぬ心にさくはなの しはしもなとかならはさるらん
鳴かはつそれかあらぬかゆたかなる なはしる水の声のまきれに
おり／＼にたなひく雲を秋はきり 春はかすみとみねのをち方

左衛門督藤原雅親

うへて後春しりそむるこのやとの 花にもみゆるちよの色かな
そことなくかすむ麓の水のをと かはつのこゑや山田成らん
なかめすてぬ心よいかに夕まくれ 五 たゝ一むらのみねの浮雲

権中納言藤原為富

あさな／＼さきそふみれはあかなくの 思ひをつくす花の下かけ
池水のふかさしられてそこにすむ 蛙のこゑそきたかにもなき
吹はらふ松のあらしのたえまかと 八雲たつ雲そみねにのこれる

左近衛中将藤原雅康

いく日をかかさねきつらんみても猶 見まくのほしき花の木陰に
せきそむるなはしる水のたえ／＼に いつすみなれて蛙鳴らん
山かつのおりたく柴の烟さへ なひきそひたる嶺のしら雲

左中弁藤原益光

うつしかふる*花の御はしの桜花 いくよの春のかさしとかみん 六

*かふる 一うふる（松）

をちこちの小田のかはつのこゑ／＼も 霞にしつむ春の夕くれ
立なひき峯によこきる天雲や よそにあげ行色をみすらん

左京大夫義直

しるしらすゆきゝやすらふ木のもとや まもらぬ花の関と成らん
せきいるゝ田のもの水のあはよりも こゑまつきえて蛙なく也
春雨のはれ行みねの浮雲に ひはらの色もみえぬ山かな

左衛門佐義統

ことくさも忘はてつゝみるほとは 心ひとつの花の木のもと
くれま^{*}たるなはしる水のをちこちに なくや蛙もこゑかすむなり

*またる 一わたる（松）

兵庫頭教氏

峯たかみたのむ木陰もなき庵の 軒はやかこふかゝる浮雲 七
うつみても花はいかなる色しあれば ふかき心に思ひそむらん

聞人やことの葉そへむ水にすむ 川出つのこゑはほのかなれとも
時のまにおもかはりして嶺の松 それとはかりに雲そうきたつ

伊勢守平貞親

桜花さく一枝にもろこしの よしのゝおくの春もみゆらん

われのみとつゝ井の水にすむ蛙 こえにも余所をしらて鳴らん

つくは山嶺の嵐のいかならん このもかのもにまよふしら雲

詠三首和哥

権僧正増運

長閑なる花にことさら思ふそよ 風たゝぬ世にあふかうれしき」八

池のおもやさそふかせあれはきこゆ也 うき草かくれ蛙なくこゑ

山にこそまよふ心もはるへきを うきたる雲のみねにみゆらん

端作同 浄定*

*「定」、底本及び(松)ママ。「空」ノ誤写歟。図版参照。



うつろはむよるの人まをおもふ哉 めかれぬ花の陰にくらして

水ふかき沢へにまよふ浮草の ねもたえ／＼になく蛙哉

*すまはゝや思ひし山のみねの雲 うきて世にふる身のたくひかも

*すまはゝや―すまはやと(松)

沙弥道賢

みるまゝにとくる心の花のひも いそくかひある春ののとけさ

せきいるゝみなくちならしかすみしく あら田はるかに蛙鳴こゑ

あけわたるみねのよこ雲たえ／＼に それとしもなき松風そ吹」九

権律師堯憲

なかめつゝ花の光もにほふ夜は 月もやあかすやとりきぬらん

うつもるゝこゑかとそきく鳴蛙 霞のそのの井ての河せに

たれとてもすみかさためぬうき世とは みえて雲ゐるみねの夕くれ

(二行分空白)

長祿二年正月廿二日月次御会始

題者 左衛門督

詠師 同

講師 益光朝臣

(武井和人)

③長祿二年二月一三日幕府当座歌会

〔国立公文書館（旧内閣文庫）蔵『室町殿月次和歌』（二〇一・〇一三六）〕

竹鷲 義一

ともに今ねくらやしむるむら雀 声する竹にうつる鶯

春氷 勝光

のとかなる日影にとけて打いつる 汀の花のひもかゝみ哉」一〇

柳摩風 増運

なひくをはいかにうらみむのとかなる 柳に風のやとりしるとも

帰雁 雅親

行すゑの田のもの友をさそひても 数やそふへき帰る雁かね

花忘老 為富

山かつのおい行ことも春はさそ 忘はてつゝ花をみるらん

苔上花 雅康

心あてにわけてかへらんこしかたも 花よりしたの苔のかよひち

浦藤 義直

春ふかみさくや藤江のうら波の 花に花そふ色そみたるゝ

谷余花 義統* *義統一ナシ（松）

山はみな青葉の後のさくらさく この谷かくれはるやのこれる」一一

早苗 道賢

民やすき世そとうけひくすみ吉の 御としろ小田にいそけ早苗を

蛩過窓 堯憲

とふ蛩影もみたれて竹の葉の 露より過る窓の夕かせ

聞萩 義一

きゝわひぬよその草葉を吹すてゝ 軒はの萩に残る秋かせ

籬薄 教氏

籬あれて風ふかぬまもをつから なひく色あるむら薄哉

雨夜虫 資任

ななき夜の雨たにもうき手枕を いかにせよとて虫の鳴らん

待月 益光

雲はみな余所に晴行月かけを 松風たかきかつらきのやま」一二

水郷月 貞親

山のはにかたふく影もさゝ浪や 月そよりくる志賀のからさき

朝霧 為富

たちつゝく霧のまかきやこえつらん いつるあさ日の近き山のは

紅葉 雅親

うすくこき一はのうちのむら紅葉 しくれはわかし露やそめけむ

時雨 雅康

しくれにはあらぬ木のはのをとまても ふりみふらすみさむき山かせ

霰残夢 資任

見し夢のすゑもとをらぬさむしろに ねやのいたまの霰ふる也

炭竈 勝光

炭竈にたてる煙の色なれや 一すちくもるをのゝしら雪」一三

寄衣恋 増運

身をうみの浪かけ衣そのまゝに ほさて恨の数やかさねん

寄鏡恋 義直

うきなかはあさき契の水かゝみ 哀かけみるほとたにもなし

寄玉恋 義統

せくまなくおつる涙のしら玉や くだけて袖の海と成らん

寄枕恋 道賢

あふことはうつゝのほかもたのまれす 夢さへうとき夜の枕に

寄糸恋 義一

いかゝせむうきに心はつくはねの 新桑まゆの糸のみたれを

寄筵恋 益光

心からかゝる思ひをすかむしろ 独ねにのみよをあかすかな」一四

寄船恋 為富

あまをふねほのみしまてをたのみにて 磯にもよらす猶思へとや

山家 雅親

人やみぬすめはすまるゝ山里の しるへさたかにたつる煙を

旅泊浪 堯憲

浪ならて枕によるの友はなし 月日かさねて紀ちの浦船

社頭祝 教氏

時しあれは君か心をみつしほの へたてなき代と神やまもらん

(二行分空白)

長祿二年二月十三日 当座

(石澤一志)

〔4〕長祿二年五月一三日幕府月次歌会

〔国立公文書館(旧内閣文庫)蔵『室町殿月次和歌』(二〇一・〇一三六)〕

詠三首和哥

早苗多

右大将義一

つくはねやふもとの小田におり立て」一五 かけよりしけき早苗とる也

五月蟬

五月山こすゑの蟬のはかくれに なくもすゝしき木との下風

寄筵恋

あふとみし夢はあとなくさむしろに その面かけをしきしのひつゝ

夏日同詠三首和哥

題同

権大納言藤原公綱

しつのおかあつめしたねをこの比は かす／＼わけてとるさなへ哉

五月雨のはるゝ日かけにせみの羽も ともにほすらし衣手のもり

いつまでかとはれぬ床のさむしろに 泪をそへてしき忍ふへき

端作同

権大納言藤原勝光

早苗とるひまこそ夏のななき日に おりたつ田子のところせきまで」一六

さみたれのあまやとりそとたちよれば しくるゝ杜の蟬のもろこゑ

たまさかに枕ならへしさむしろは 猶うつりかやしきしのはまし

左衛門督藤原雅親

しつめかおりたちてしる早苗哉 ゆたかなるへき秋の田のみを

なく蟬のは山のかげにくらす日に をのかさ月のとりもこととへ

見せはやなあらましにのみはらひきて ちりもつもらぬ夜はのさむしろ

権中納言藤原為富

うへわたす千町の早苗かきりなく 民のかすさへみゆる比かな
いとせめてこゑなつくしそ鳴蟬の さ月にかきる物ならなくに
いくよわれとはれぬ床のすかむしろ たゞ徒にまるねしつらん」一七

権中将藤原教国

ゆたかなる君か心のたねとてや とりもつくさぬさなへなるらん
五月雨のはるゝ木のまの夕つくひ さすや岡へに蟬そ鳴なる
あふことは泪かたしくさ蕙に いつか心のおくものへまし

左近衛権中将藤原雅康

さま／＼にいそくとすれと千町田や つきぬ早苗にけふもくらしつ
時ならぬしくれとやきくさつき山 しけみもりくる蟬のもろこゑ
いつれ猶ふかきとかしるあはぬよの 恨もちりもつもるさむしろ

左中弁藤原益光

つくはねのすそわの田あは雨はれて このもかのもにさなへとる也
五月雨のたえますゝしき梢より」一八 秋におとろくひくらしのこゑ
いたつらにあやなくすきはあやむしろ *せ殿をになるまでに独もやねん

*せ殿一ナシ(松)

左兵衛佐義敏

天地の心にかなふときなれや 四方にあまねく取早苗かな
かせわたる木の下むきの秋の色を ふくからをくる空蟬のこゑ
おきいてし露の名残を袖にとめて 猶しきしのふ床のさむしろ

讃岐守成之

いかはかりしけきさなへそなかき日に 猶とりのこす露のひとむら

本ノマ、

*二行分(一首相当)空白。(松)モ。

「本ノマ、」ハ一首闕ノ謂也。「本ノマ、」、(松)ナシ。

くれなゐによはる涙のちむしろに おなし思ひをしきしのひつゝ
左京大夫義直」一九

うき草のまじる早苗を引わけて とるてあまたの小田のますらお
五月雨のはれまにほすかこゑはへて なく蟬のはの衣でのもり
思ひねの人にあふ夜のあとなれは 袖しきかへす夢のさむしろ

*左衛門佐義統

遠近にはこふもしけき千町田に あまる早苗はとりもつくさす
郭公名におふをのかさ月かは よもの木すゑのせみのもろこゑ
恨みわひうき手すさひのさ蕙に 泪いくたひまきかへすらん

*左衛門佐一左衛門(松)

兵庫頭教氏

いとまなくしつか心やみえぬらん とるやさなへのかすにまかせて
声はゝやしけみのほかに聞えきぬ さ月の空の蟬のは衣」二〇
思ひわひて独ぬるよのさむしろに かさねてしくは涙成けり

伊勢守平貞親

けふいくかおりたつ田子のとるてより 千町にあまるさなへ成らん
こすゑさへゆるかぬ日にもさ月山 なひくかたあるせみのもろこゑ
よしさらは涙のしたにくちもせよ ちりさへつらき床のさむしろ

詠三首和哥

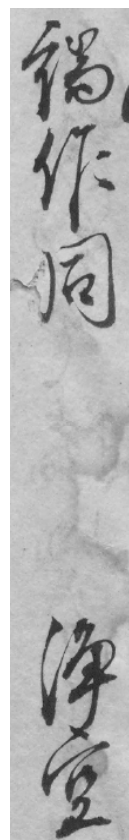
権僧正増運

ほしやらて田子のもすそもくちぬへし 千町のさなへうふる日数に
晴まなきさ月の空にいとゝしく 雨をなそへせみのもろこゑ
ちりをたにはらはぬ床のさむしろに そのよの夢をしき忍ひつゝ

端作同

*浄空」二一

*2長祿二年二月一三日幕府月次歌会ノ「浄定」トノ比較ノタメ図
版ヲ掲出ス



けふも猶おりたつ田子のひまもなく 日数をさへにとるさなへかな
をのかねもさはらてたかしうつ蟬の 鳴やさ月のは山しけ山
いもゐする草のむしろもある物を 心ものへぬ恋のくるしき

沙弥道賢

をちこちにおりたつ田子のひまもなく とるや千町の早苗成らん
ならのはのこすゑにさけは五月雨の はれまもせみのこゑにうつりぬ
くちねたゝぬるよ涙のすかむしろ しきしのふへきかたしなけれは

権律師亮憲

宮人のこゑもあまたにすみのえや 御戸しろ小田のさなへとるらし
こすゑには秋やかよへるなく蟬の こゑのしくれはさ月ともなき」二二
思はずよ涙の床のさむしろを しくよの夢にしはしみんとは

(二行分空白)

長祿二年五月十三日月次御会

題者 左衛門督
読師 日野大納言
講師 教国朝臣

(日高愛子)

5長祿二年十一月一三日幕府月次歌会

〔国立公文書館(旧内閣文庫)蔵『室町殿月次和歌』(二〇一・〇一三六)〕

詠三首和歌

雲端冬月 義一

さためなきしくれの雲のうきまよひ 月も里わく冬のよの月

海辺松雪

さしあかすよさのうら風をとたえて 雪ふりつもるあまのはしたて

隔遠路恋

みたれわひおもかけをのみ忍ふ哉 うきみちのくのまのゝかやはら

冬日同詠三首和歌」二三

題同 従一位藤原資任

吹まよひ雲にあらしのさゆる夜は 月のかつらも霜むすふなり

入うみの浪ちのかせもおさまりて 雪にそなひくみほの松はら

一夜たに夢にもあはゝもろこしの よしのゝ山のよしへたつとも

端作同 権大納言藤原公綱

冬のよのふくるあらしも猶さえて 雲まさやかに月そこほれる

ほともなく雪ふりみちてしほかせも はやうつもるゝ浦の松はら

心のみゆきかへれともかよひえぬ わか身にとをき中そくるしき

権大納言藤原勝光

しくれつゝそめて秋みしくもまより 月のかつらの色そさえぬる

塩風にそなれし松を今朝は又」二四 をのれなひかぬ浦のはつ雪

うみ山のへたてより猶つれもなき 人の心のみちやはるけき

左衛門督藤原雅親

さえわたる風のはけしき雲ちには 月ものとかにみえぬ影かな
今朝みれはさなからあまのとまひさし はま松かえの雪になひきて
思ひやるをちかた人も身をうちに 水まさる比や袖ぬらしけむ

権中納言藤原為富

よをさむみ風にわかるゝむら雲に はなれてみゆる月そさえ行
あまのすむ磯屋にたてる松の色の けふりをうつむ雪の曙
契のみなみのちさとはへたつとも 心つかひのみちはまよはし

参議権中将藤原教国「二五

さえくるゝ雪けの空は雲とちて かすむににたる冬の夜の月
しつえこそ青葉にかへれこす波も あらき磯への松のしら雪
思ひやる心もくるしかよひちの ほとをくもみのよそにへたてゝ

参議権中将藤原公躬

さえわたる嵐や空にみちぬらん 雲まにこほる夜半の月かけ
すみよしのうらわの松のちよのかけ 木高く見えてつもる雪かな
思ひわふる心つかひやひまもなく とをちの里に行かへるらん

左近衛権中将藤原雅康

さえくらす嵐をさむみ雲の浪も 氷るかうへにこほる月影
けさは猶千重につもりてはま松も みえぬたかつのうらの白雪「二六
あふことはなみちへたつる中なれと かよふ心のさはりやはある

左中弁藤原益光

はれくもりしくるゝ雲のは袖より うけうつり行冬の夜の月
おきつ浪色うちそへてすみよしの 松よりしらむ雪の明ほの
日に千たひかよふ心はありそ海も はるけき山もさはらさりけり

*うけうつり行―かけうつり行(松)

讃岐守成之

吹はらふ雲の衣の木からしに わか袖かけてこほる月影
よせてしもかへらぬ浪やおほ淀の まつのしつえにつもる白雪
へたつともかよふ心のみちしはに 露の契やかけてたのまん

*よせてしも―よせてしと(松)

左京大夫義直

冬かれの木すゑさはらぬよなゝも「二七 雲まをしのく山のはの月
ふりつもる雪のなかめや浪こすと いはぬはかりのうらの松原
八百日行はまのまさこをへたてゝも 心くたりぬ中とならはや

左衛門佐義統

あらしふく雲の衣をおほふ月 ほころひいつるかけそさむけき
浪こえぬ木すゑもおなし白雪に あらはれのこるいそのまつかね
なけかしよ人の心のおく見えは かよふにとをきみちのへたても

兵庫頭教氏

すみのほる雲よりをちのよはの月 ふくるやさむき光成らん
くもりつるおきつしほかせ吹はれて 雪をあらはす海こしのまつ
海山をいかにへたつる身なりとも「二八 かよふ心のみちはたとらし

詠三首和歌

権僧正増運

さゆるよもこほらぬ雲の浪ちとて 月のみふねはさやかにそ行
しほかまの煙はまかふ色もなし 雪にこもれるうき嶋の松
契りさへ隔つる中よすむさとの とをきはかりをいつかなけきし

端作同 沙弥道賢

風はやみ雪けの空のはけしきに 雲まの月の影そさむけき

ふる雪のうつみはてたるいそやまの 松をはとはてうら風そふく
思ひやるよるのころもにしられけり 浪ちへたてしむかしかたりは

権律師堯憲

うき雲の月は水なき空なから」二九 こほりにすめる有明のかけ
うつもるゝ松の木すゑは浪かけて 雪にかさなるあまのはしたて
ゆめちさへなをそへたつるうき中は とを山鳥のちきりならねと

(二行分空白)

長祿二年十一月十三日月次御会

題者 左衛門督

読師 同

講師 雅康朝臣

(山本啓介)

〔6〕康正元年十二月廿九日野政光十三回忌品経和歌(抄)

〔国立公文書館(旧内閣文庫)蔵『室町殿月次和歌』(二〇一・〇一三六)〕

詠巖王品和歌

権大納言勝光

花もさそひらけそふらんおやのため わきてちきれる法のことは
とし月をふるにつけてもをろかなる わか身のためと猶忍ふかな

詠勸発品和歌

式部卿親王作名

民部少輔永秀

汝能護助是経」三〇

たつねきて今みる人やわしの山 やかてたへなる法の花もり

あはれさやかきりしられぬ十年あまり みし世忍ふのころも忘れす

*みし世忍ふのーみし世に忍ふ(松)

(以下空白)

本云

康正元年十二月廿九日弁入道政光十

三廻忌新大納言勝光卿勸進之

但十一月廿九日

取集之

(以下空白)」三二

右此一帖者於打聞間隙令書

写之彼本二帖長祿年中御

月次実相院准后増運自筆

品経和歌者入道大納言雅親卿

自筆也

(二行分空白)

文明十五年五月十日

以名判形トス

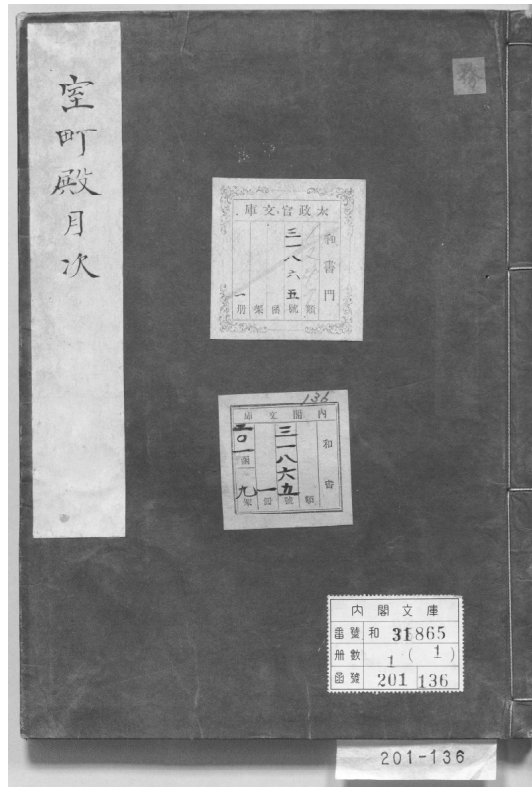
尚氏

(山本啓介)

【略解題】

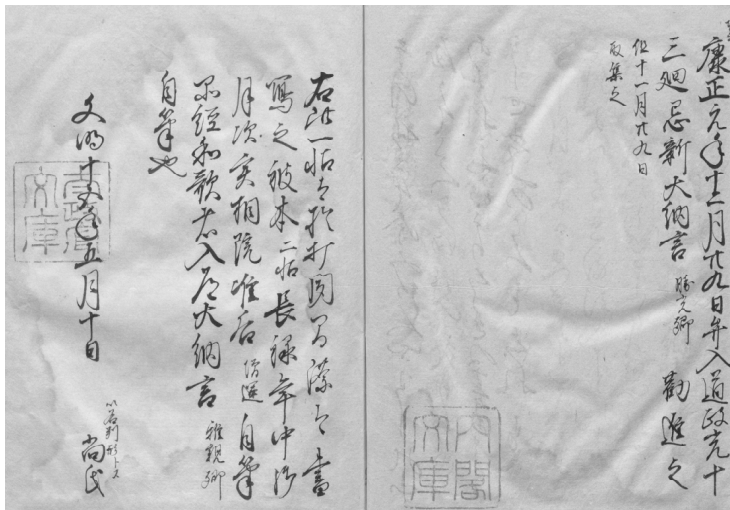
小論で底本としたのは、国立公文書館（旧内閣文庫）蔵『室町殿月次和歌』（二〇一〇一三二六）（以下内閣本）である。該本の書誌は以下の通り。

袋綴装一冊。二七・二×一九・一cm。前表紙はこげ茶無地のやや厚手の楮紙（後補、後掲図版参照）。

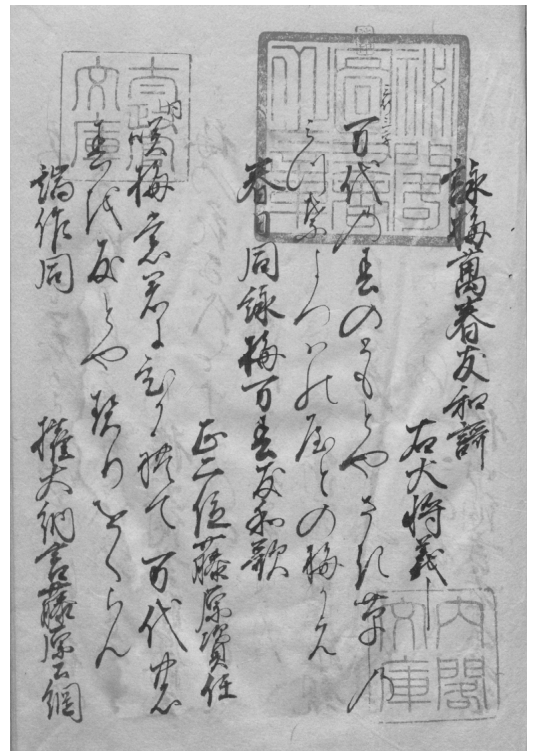


【前表紙】

外題（題簽、打付書）が前表紙左にあり、「室町殿月次」と墨書される。本文とは別筆であり、後補の可能性が高い。本文料紙は楮紙。端作題が「詠梅萬春友和詞」とある。遊紙が首尾に各一丁置かれ、墨付は三二丁。蔵書印は、「秘閣／圖書／之章」（方朱印、墨付一丁表右上）、「内閣／文庫」（方朱印、墨付一丁表右下・墨付三二丁裏左下）、「太政官／文庫」（方朱印、墨付一丁表左上・墨付三二丁表左中央）、以上三種五顆捺される（後掲図版参照）。一面九行書、和歌一首一行書。江戸中期写。紅葉山文庫旧蔵。



【墨付第31丁裏～第32丁表（本奥書）】



【墨付第1丁表】

本奥書が二種存する（前掲図版参照）

A 本云 康正元年十二月廿九日弁入道政光十

三廻忌新大納言勝光卿勸進之

但十一月廿九日

取集之

（以下空白）「三二ウ

B 右此一帖者於打聞間隙令書

写之彼本二帖長祿年中御

月次実相院准后増運自筆

品経和歌者入道大納言雅親卿

自筆也

（一行分空白）

文明十五年五月十日

以名判形トス

尚氏」三二才

この本奥書（A）と、**6**康正元年十二月廿九日野政光十三回忌

品経和歌（抄）とは密接にかかはつてゐる。

このことについては既に、井上宗雄「室町前期歌書伝本書目稿」

（『中世歌壇史の研究「改訂版」』（風間書房、一九八四・六）所収）

で、次のやうに述べられてゐる（一部抄出）。

康正元年……

十二月29 日野政光十三回忌品経和歌 釈教歌詠4（品経和歌）

義政・兼良……（品経歌・懐旧歌各一首。なお内閣文庫「室

町殿月次」や、彰考館「一会和歌纂」などの内にある長祿二

年月次会歌の後ろに、勝光の「花もさけ……」および永秀の

「たつねきて……」の品経和歌各一首がある。（前掲書・五

九四頁・下段）

即ち、本奥書Aは、「康正元年十二月廿九日日野政光十三回忌品経和歌」**6**のみにかかるものと解することが至当である。

しかしながら、その内容は、積文に掲げた通り、勝光と永秀の歌各一首のみである。本書と同じ内容を持つ彰考館蔵『一会和歌纂』（未見、井上前掲書による。なほ後述）、同蔵『月次御會和哥』（已一三・〇七二九二、国文学研究資料館紙焼による）、及び、肥前島原松平文庫蔵『室町殿月次長祿二』（一四〇―一三）（国文学研究資料館「日本古籍デジタル画像データベース」による）も同一のありやうであることから見て、抄出は内閣本の書写時における所為ではなく、これら四本の親本の段階で既に抄出がなされてゐたと思はれるのである。彰考館本『月次御會和哥』において、AとBとの間に、

私目 和三品経之哥寫本欠落 ※「三」字、「〇」ヲ上書ス

なる注記が存することも、傍証たりえよう。

本奥書Bは、さらに興味深い事実を知らせてくれてゐる。

まづ、書写者の大館尚氏が、「打聞間隙」にこれを書写したとあるが、これは、文明十五年二月一日に編纂が開始された『撰藻鈔』（義尚打聞）の作業の「間隙」に（尚氏は、打聞の申次を勤めてゐた）、打聞所に集められてゐた歌書の中から、二点（長祿年中御月次「品経和歌」）を書写した（「二帖」を「一帖」に合写したのであらう）ものであることが分かる。さらに、尚氏が書写した親本の内、「長祿年中御月次」は、詠者の一人でもある実相院増運筆、「品経和歌」は飛鳥井雅親筆であつた、といふことも分かる。

なほ前述の「抄出」と尚氏とを結びつけて考へるべきか否かは、

判断に至らない。

本書はこのやうに、『撰藻鈔』編纂のために集められた歌書の具
体相を知ることが出来る好例であるといへよう。

○

校合本として利用した肥前島原松平文庫蔵『室町殿月次長祿二』及び、
一見するを得た彰考館蔵『月次御會和哥』〔巳一三・〇七二九二〕に
ついで、画像・紙焼などから分かる範囲で、書誌等を記しておく。

①肥前島原松平文庫蔵『室町殿月次長祿二』〔一四〇―一三〕

国文学研究資料館「日本古典籍デジタル画像データベース」による。

袋綴装一冊。題簽が表紙左に貼られ、「室町殿月次長祿二」と墨書さ

れる。「尚舎源忠房文庫」の蔵書印なし（『肥前島原松平文庫目録』

においても同様の記載）。首尾に遊紙各一丁。一面九行書、和歌一

首二行書（内閣文庫本と同じ）。本奥書A・Bともに有り。江戸中

期頃の書写歟。

②彰考館蔵『月次御會和哥』〔巳一三・〇七二九二〕

袋綴装一冊。表紙に次の如き内容を持つ貼紙が存する。

五十四番哥合

屏風詩歌

長久八年哥合

月次御會和哥

融□□一□ ※□ハ虫損

前表紙見返しに以下の如き内容を持つ貼紙が存する。

右五十四番詩歌合壹冊元祿四年末夏小野澤介之進

於京師写之

一面十行書、和歌一首二行書。本奥書A・Bともに有り。

また、前述の通り、本奥書A・Bの間に以下の文言が存する。

和三品^私経之哥寫本欠落 ※三、「〇」ト上書サル

書式や行詰め等で、内閣文庫本・松平文庫本と異なるところがあり、
早い時期に分かれて書写された系統の一本と思はれる。

これは三本は、文明十五年大館尚氏の書写奥書（本奥書B）を有する
ので、「尚氏本」系統と見做すことが出来る。注意すべき共通点として、

一点指摘しておく。〔4〕長祿二年五月一三日幕府月次歌会において、讃岐

守成之の二番目の歌を闕く（底本一九ウ、「本ノマ、」ト細字ニテ注記

アリ）。恐らくは、尚氏筆本においても、闕けてゐたのであらう。

○

先に「未見」と記した彰考館蔵『一会和歌纂』について記しておく。

既述の如く、「康正元年十二月廿九日野政光十三回忌品経和歌」〔6〕

に関して、井上は、それが「彰考館『一会和歌纂』」などの内にある長祿

二年月次会歌の後ろ」に存すると述べてゐる。果たして、長祿二年正月

二二日室町殿（幕府）月次始〔1〕の項を見ると（『室町前期』五九五

頁上段）、「一会和歌纂」とある。事実、国文学研究資料館「日本古典

資料調査記録データベース」を検すると、彰考館蔵『一会和歌集』なる

典籍がヒットする。掲出される書誌を整理して示すと、

函架番号 巳 拾壹 ○七一六〇

外題・内題ナシ。

包紙表紙に「一会和歌纂第二・十一種合本彰考館」

「本書は合綴本なり。1為兼卿配所和歌2読観世音経偈三十三首之

和歌3春日法楽七首倭歌4長祿二年室町殿目次5永正年中和歌6勸

修寺家九十賀和歌*貼紙ニ右勸修寺前内府入道九十賀和歌以賀茂氏
人岡本宇平本写之延宝九年辛酉夏五月7和歌会文禄三年二月廿九日
8後鳥羽院四百年忌御会之和歌9無名歌会10夢中和歌*貼紙ニ夢
中和歌元禄乙亥夏以京師人大島治左衛門本写之大串元善11高野山
全身舍利倭歌*貼紙ニ前記10に同じ。」

井上が指摘する如く、確かに「長禄二年室町殿月次」は収められてゐるやうである。

ところが、国文学研究資料館が現に所蔵する『一會和歌纂』(C一二一七)は、前表紙題簽に「一會和歌纂 一」とあり、内容も前引『一會和歌纂第二』とは異なる(日本古典籍総合目録データベースには「著者 頭季(藤原/頭季) 実行(藤原/実行) 等 成立年 元永元」との書誌が掲げられてゐる)。

『彰考館圖書目録』(二一九一八・一一)を検するに、
一會和歌纂 頭季、實行其外詠 元永元年 一 一一 寫
(四三一頁)

との記載があり、これは国文学研究資料の紙焼(C一二二七)と一致する。

- 以上のことを総合的に鑑み、事情は以下のやうではないかと推測する。
- ① 「一會和歌纂」は、もともと、第一・第二からなる二冊本であった。
 - ② 『彰考館圖書目録』が、第一のみを掲出した誤りのために、『国書総目録』以後、第一冊のみを「一會和歌纂」とするやうになつた。
 - ③ 一方、その後彰考館側で、五桁の函架番号を付することがあり、その折に、第一冊・第二冊、同一の番号が割り振られた。

④ そのため、「一會和歌纂」を彰考館で閲覧する場合、第一冊が出納

されたり、第二冊が出納されたりすることがあつたのだらう(日本古典資料調査記録データベースに、第二冊のみがあり、第一冊がないのはそのため)。

⑤ 国文学研究資料館が撮影する際には、逆に第一冊が出納され、これのみを撮影した。

現在、彰考館所蔵の古典籍を熟覧することは出来ず、想像に想像を重ねただけであるが、一つの推定を示してみた。

○

長禄二年に幕府で催行せられた歌会に関しては、井上宗雄『中世歌壇史の研究 室町前期』に、以下の指摘を見る。

内閣文庫蔵の室町殿月次と彰考館蔵の月次御会和歌(已拾参。五十番詩歌合等に合綴)とは同本で、長禄二年正月二十二日の幕府月次御会始以下、二月十三日・五月十三日・十一月十三日の月次詠を収める。題者・読師は雅親、講師は雅康が多くなり、作者は義政以下、公家に烏丸資任・三条公綱・同公躬・日野勝光・冷泉為富・烏丸益光・滋野井教国及び雅親・雅康・浄空、武家に一色義直・畠山義統・大館教氏・伊勢貞親・細川道賢・斯波義敏・細川成之ら、僧侶に増運及び常光院堯憲らが参じた。公家は主として幕府に親しい人々であるが、歌道家の人は堯憲を含めてすべて出席している。巻頭歌「万代の春の友とやさき草のみつばよつばの宿の梅がえ」(義政)。(前掲書・一八〇頁)

簡にして要を得た記述である。そこで、井上が触れてゐない③長禄二年二月一三日幕府当座歌会についてのみ述べておくこととする。

②長禄二年二月一三日幕府月次歌会に出詠した歌人は、ここでも出詠

してゐるが、唯一、浄定（釈文にて注記した如く、恐らくは「浄空」の誤写で、飛鳥井雅永のことであらう。釈文図版二点参照）のみ出詠してゐない。

概ね各歌人、二首詠んでゐるが、三首なのが義政・雅親・為富の三名、逆に一首なのが伊勢貞親である。貞親はともかく、義政以下三名の三首は、穏当なところといふべきであらう。

○

最後に、**〔6〕**康正元年十二月廿九日日野政光十三回忌品経和歌（抄）について、少しく述べておく。

本書に引かれる二首を、宮内庁書陵部図書寮文庫蔵御所本『品経和歌』〔五〇一・八一六〕における本文で確認しておく。

詠敵王品和哥

権大納言勝光

◆^(複製)花もさそひらけそふらんおやのため^にわきてちきれる法の言のは
こと

とし月をふるにつけてもをろかなる我身のためと猶忍ふかな

詠勸発和哥

^{式部卿親王作名}
民部少輔永秀

汝能護助是経

たつねきていまみる人や鷲の山やかてたへなる法の花もり

こと

あはれさやかきりしられぬ十とせあまりみし世しのふのころも忘れず
本文に大きな相違はない。

それよりも注意すべき点は、この四首が、墨付第四二丁に書写されて

ゐるすべての本文であり、かつ、最後の品経歌だといふことである。つまり、『康正元年十二月廿九日日野政光十三回忌品経和歌』なる作品はここで終はるのである。作品名の末尾に「抄」を付した所以である。

とはいへ、ミテクレは確かに「抄」なのだが、むしろ「末尾切り出し」とてもいった方がより実態に即してゐると思はれる。

（武井和人）